

フリッツ・クライスラーの音楽におけるウィーン —作品で表現された「ウィーンらしさ」—

ヴァイオリニスト
常葉大学短期大学部非常勤講師
竹内 英美子

はじめに

フリッツ・クライスラー Fritz Kreisler (1875-1962) は、20世紀前半に世界的な活躍をしたヴァイオリニスト・コンポーザーである。彼は自分のコンサートで演奏するために、非常に多くのヴァイオリン曲を作曲した。親しみやすいクライスラーの音楽は大いに人気を集め、多数の作品がクラシック界を越え、今も愛聴されている。

さてクライスラーの作品には、彼の故郷のウィーンに因んだ楽曲が多く含まれている。《愛の喜び》《愛の悲しみ》《美しきロスマリン》という大変有名な作品は「ウィーン三部作」とも呼ばれ、また《ウィーン奇想曲》などは彼の楽曲の定番である。すなわちクライスラーの音楽において、「ウィーン」は大きな位置を占めているのである。しかしこれまで、クライスラーとウィーンについて考察する研究はほとんど行われてこなかった。A. リンスバウアーの論文¹はこの問題を中心に据えた貴重な研究であるが、示唆には富みながら分析対象は少数の楽曲に留まり、クライスラーの全作品との関連を俯瞰したものには至っていない。一般にクライスラーは作曲家としてよりも演奏家として捉えられがちで、学術的な研究対象として扱われることはほとんどなかったのである。しかし世紀を越えてなお人々を魅了するクライスラーの作品に向き合い、その大きな要素であるウィーンについて考察する意義は大きい。本稿は、ウィーン関連のクライスラー作品の全体像を捉え、その内容に迫る試みである。

1 Andrea Linsbauer, *Das Wienerische Moment in den Kompositionen Fritz Kreislers*, Frankfurt am Main 2009.

1. クライスラーとウィーン

(1) クライスラーとウィーンの関わり

初めに、クライスラーの生涯におけるウィーンとの関わりを確認しておく。

フリッツ・クライスラーは、1875年2月2日、オーストリア＝ハンガリー帝国の首都ウィーンの第2区で、ユダヤ人開業医の家庭に生まれた。父親のザムエル・クライスラーは、1871年に東方の帝国領ガリツィアからウィーンに移り住んでいる。母親のアンナ・レヒェスは、それよりも前にやはり東方からウィーンへ来ていたらしい²。フリッツは彼らの6人の子供のうちの第2子であった。ザムエル・クライスラーは、ユダヤ人が多く住むこの第2区に1920年まで住んでいる。

父親がアマチュアとして弦楽器を楽しむ環境で、クライスラーは幼いうちから音楽の才能を現した。7歳になるとウィーン音楽院に入学し、ヨーゼフ・ヘルメスベルガー二世の指導を受ける。当時のウィーン音楽院へはヨーゼフ・ヨアヒムやアントン・ルビンシテーインなど重要な演奏家が訪れることがあり、クライスラー少年に大きな印象を残している³。入学から3年後、10歳のクライスラーは金メダルを得て卒業し、続けてパリ音楽院のランベール・マサールのクラスに学ぶ。2年間をパリで過ごし、一等賞特賞を得て音楽院を卒業すると、1887年にウィーンへ戻った。この秋から翌春にかけてピアニストのモーリッツ・ローゼンタールのアメリカ・ツアーに同行するが、帰国後の動静には不明が多い。長年にわたってクライスラーの主要な評伝と位置づけられてきたルイス・ロックナーの著作では、10代後半のクライスラーはヴァイオリンを置いてカトリック系のギムナジウムに学び、続けてウィーン大学の医学部に入学したとされているが、両校にクライスラーの在籍記録を確認することができない⁴。実際にはクライスラーはこの期間、東欧の地域を中心に少数のコンサートへ出演している⁵。ヴァイオリンの演奏を続けながらも目覚ましい成果を上げることはできな

2 Matthias Schmidt, *Fritz Kreisler. Ein Theater der Erinnerung*, München 2022, S. 109.

マティアス・シュミット『フリッツ・クライスラー 変幻自在なヴァイオリニスト』畑野小百合訳、東京：2025年、142頁。

3 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*. (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 13.

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner, Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、30頁。

4 Matthias Schmidt, *Fritz Kreisler. Ein Theater der Erinnerung*, München 2022, S. 107f.

マティアス・シュミット『フリッツ・クライスラー 変幻自在なヴァイオリニスト』畑野小百合訳、東京：2025年、139頁以降。

5 Matthias Schmidt: "Fritz Kreisler - ein jüdischer Geiger?", in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im*

かった、というのが事実のようである。1891年にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団へ、ブルッフの協奏曲のソリストとして自薦する手紙を書いている⁶。(この願いは7年後に実現した。)その後、1年間の志願兵として軍務に従事したようだが、詳細は不明である⁷。1896年には宮廷歌劇場の入団オーディションに臨んだが、不合格となった⁸。初見能力やリズム感の不足が理由とされたが、実際には、クライスラーの個性の強い音色がオーケストラの団員として不適格であると、審査員を務めたコンサート・マスターのアルノルト・ロゼらが判断したものと考えられる。

転機が訪れたのは、1898年であった。1月、ハンス・リヒターが指揮するウィーン・フィルハーモニー管弦楽団にソリストとしてデビューし、マックス・ブルッフのヴァイオリン協奏曲第2番を演奏してまずまずの評価を得る。翌1899年12月には、アルトゥール・ニキシュ指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団にメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲でデビューし、圧倒的な成功を収めた。以降は、1900年にニューヨーク・フィル、1902年にロンドン・フィルへ順調にデビューし、カーネギー・ホールへも頻繁に登場するようになる。世界各地での多忙な活動のため、クライスラーは拠点をベルリンやニューヨークに置き、ウィーンへは時々帰郷するのみとなった。1902年には、ドイツ系アメリカ人のハリエット・リースと結婚し、国際的な活動をますます活発化する。クライスラーはコンサート活動のほか、当時発展中であったレコード録音に積極的に取り組み、さらに多数の作品の楽譜出版も始めた。

1914年、順調であったクライスラーの活動は一時中断する。7月、第一次世界大戦が勃発すると、オーストリア軍予備役少尉の身分にあったクライスラーも召集された。スイスの保養地で静養していたクライスラーは即座にウィーンへ赴き、8月にはレオーベンの部隊に配属され、9月にはガリツィア地方の前線へ向かったようである⁹。

Exil: Vom Wunderkind zum "König der Geiger". Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw., hrsg. von Gerold Gruber, Wien 2023, S. 35-49, hier: S. 37.

6 Nobuko Nakamura, Ulrike Anton: "Kreisler und Wien", in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im Exil: Vom Wunderkind zum "König der Geiger". Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw.*, hrsg. von Gerold Gruber, Wien 2023, S. 99-104, hier: S. 99.

7 Matthias Schmidt, *Fritz Kreisler. Ein Theater der Erinnerung*, München 2022, S. 30f.
マティアス・シュミット『フリッツ・クライスラー 変幻自在なヴァイオリニスト』畑野小百合訳、東京：2025年、38頁以降。

8 Nobuko Nakamura, Ulrike Anton: "Kreisler und Wien", in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im Exil: Vom Wunderkind zum "König der Geiger". Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw.*, hrsg. von Gerold Gruber, Wien 2023, S. 99-104, hier: S. 99.

9 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*. (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 142 ff.

その後、詳細不明だが10月に退役、11月にアメリカへ渡り、12月には演奏活動を再開している。アメリカにおいて、クライスラーはウィーンに因んだ作品を出版したり、1916年に崩御したフランツ・ヨーゼフ一世への哀悼の言葉を発表したりしていたが、1917年にアメリカが連合国として参戦した後は、公の活動を自粛せざるを得なくなった。

戦後は、徐々に活動を再開する。ウィーンを再び訪れたのは1920年であった。母親は戦前に他界していたが、父親も1921年にウィーンで没する。1924年、クライスラーは念願の邸宅をベルリンの高級住宅地グルーネヴァルトに得た。

1932年12月、クライスラーはオペレッタ《シシィ *Sissy*》をアン・デア・ウィーン劇場で初演し、大成功を収めた。しかし翌1933年3月、ナチスがドイツ政権を掌握すると、4月には指揮者のアルトゥール・トスカニーニがドイツでの演奏拒否を広く呼びかける。クライスラーは当初、穏便な解決を図ろうとしたが、ナチス・ドイツに好意的であるとしてウィーンのマスコミから激しい攻撃を受け、遂に7月、ドイツ国内での演奏活動を断念した¹⁰。とはいえ、クライスラーに対するナチス政権の態度は曖昧であった。ユダヤ人音楽家は1932年頃からヨーロッパでの活動に困難をきたし、続々とアメリカ等へ亡命していたのだが、クライスラーは1939年までベルリンの自宅に住むことができていたのである。とはいえ、情勢は予断を許さなかった。1935年、ウィーン市は名誉リングをクライスラーに授与した。授与式へ参加するためにオーストリアへ入国する際、クライスラーは自らをアメリカ国民として申告している¹¹。その3年前の《シシィ》初演の際も同様であった。クライスラーはかなり早い時期から、アメリカへの移住を視野に入れていたものと考えられる。

1938年3月、オーストリアは遂にナチス・ドイツに併合された。クライスラーは同年、フランス国籍を与えられるが、ユダヤ教団から出生証明書を得るためにウィーンにも立ち寄ったようである¹²。クライスラーの妹および義妹と甥は、同年までにこの

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner. Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、159頁以降。

10 Matthias Schmidt, *Fritz Kreisler. Ein Theater der Erinnerung*, München 2022, S. 117f.

マティアス・シュミット『フリッツ・クライスラー 変幻自在なヴァイオリニスト』畑野小百合訳、東京：2025年、151頁以降。

11 Nobuko Nakamura, Ulrike Anton: "Kreisler und Wien", in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im Exil: Vom Wunderkind zum "König der Geiger". Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw.*, hrsg. von Gerold Gruber, Wien 2023, S. 99-104, hier: S. 103.

12 Matthias Schmidt: "Fritz Kreisler - ein jüdischer Geiger?", in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im Exil: Vom Wunderkind zum "König der Geiger". Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw.*, hrsg. von

教団から脱退するのだが、クライスラーは所属し続けていたのである。第二次世界大戦が開戦した1939年9月、クライスラーはアメリカ合衆国に亡命し、1943年にアメリカ国籍を得た。

亡命後、クライスラーが再びヨーロッパを訪れることはなかった。1959年、ウィーンやオーストリアに功績のあった人物に与えられるカール・レンナー賞を受賞した際も、高齢のクライスラーは授与式への出席を見合わせている¹³。1962年1月31日、クライスラーはニューヨークで没した。

(2) 世紀末ウィーン

クライスラーは、1900年頃に世界的な活躍を始めるまで、もっぱらウィーンで暮らしていた。すなわち彼は青年時代を「世紀末ウィーン」の独特な環境の中で過ごしたのである。クライスラーの音楽を育んだとも言えるその時期のウィーンについて、ここで見ておきたい。

ウィーンはまず、多民族国家であるオーストリア＝ハンガリー帝国の首都であった。600年以上も続いたハプスブルク王朝のほぼ最後の皇帝、フランツ・ヨーゼフ一世（1830～1916年、在位1848～1916年）がここに君臨しており、その治世は68年間に及んだ。19世紀後半には市壁の跡地がリンク大通りとして整備され、国会議事堂や劇場など主要な建物が次々に建設された。人口も飛躍的に増加している。帝国内では民族独立の気運が高まっており、政情は不安定だったのだが、ウィーンではそれらを直視せぬ享樂的な風潮が顕著であった。オペレッタが全盛期を迎え、ワイン酒場のホイリゲも大いに繁盛している。

そして重要なのは、世紀末芸術の爛熟である。美術、音楽、演劇、文学、批評、建築など様々な分野の多くの芸術家や文化人が、ウィーンにおいて活発な創作活動を繰り広げていた。彼らはカフェに集まり、ジャンルを越えて相互に刺激し合い、革新的な成果を生み出した。独特の創造の活況は第一次世界大戦が始まる1914年まで続いたため、「世紀転換期の芸術」とも表される。

この時期のウィーンでは、各分野においてユダヤ人が活躍していたことも特筆に値する。写真は、ユダヤ人仲間と楽しむクライスラーを写したものである。左から2番目がクライスラー。中央でチェロを弾くのは、現代音楽の作曲家アルノルト・シェー

Gerold Gruber, Wien 2023, S. 35-49, hier: S. 47.

13 Nobuko Nakamura, Ulrike Anton: “Kreisler und Wien”, in: *Fritz Kreisler: Ein Kosmopolit im Exil: Vom Wunderkind zum “König der Geiger”*. Ausstellung der Exilarte Zentrum der mdw., hrsg. von Gerold Gruber, Wien 2023, S. 99-104, hier: S. 103.

【写真1】 ルイ・サヴァール（ホルン）、フリッツ・クライスラー（ヴァイオリン）、アルノルト・シェーンベルク（チェロ）、エドゥアルト・ゲルトナー（ヴァイオリン）、カール・レートリヒ（笛）（バイエルパツハ、1900年）



©アルノルト・シェーンベルク・センター、ウィーン (©Arnold Schönberg Center, Wien)

ンベルクである。一番右はカール・レートリヒという裕福な実業家で、彼はパトロンとして多くの芸術家たちを支えていた。彼らのサークルには、互助会のような機能が働いていたらしい。

なお、クライスラーにとってのウィーンを考える際、音楽の都としての歴史を見逃すことはできない。街の至る所に往年の大作曲家の足跡を感じられたであろうし、ブラームスやブルックナーはいまだ活動中だったのである。

2. ウィーン関連のクライスラー作品：分析対象

クライスラーは、自分のコンサートで演奏するために、非常に多くのヴァイオリン曲を作った。クライスラー自身が作曲したオリジナル作品、および有名なオペラや管弦楽曲などからアレンジした作品である。クライスラーの作品は聴衆の人気を集めたため、1910年に楽譜の出版が開始された。マインツのB. ショッツ・ゼーネ社や、ニューヨークのチャールズ・フォーリー社等から、40年あまりに237点もの楽譜が出版されている。なお、ワシントンのアメリカ議会図書館にある「フリッツ・クライスラー・コレクション」(“Fritz Kreisler collection” of “Library of Congress” (Washington, D. C.)) には、未出版作品の手稿譜が多数所蔵されているが、本稿は出版された作品を

対象に論じることとする。

クライスラーの作品には、ウィーンとの関連を指摘できるものが数多い。まず、ウィーンに縁のある作曲家の作品を30曲あまり、ヴァイオリン用の小品へ編曲している。取り上げられた作曲家と曲数を挙げると、古典の作曲家ではベートーヴェン14曲、モーツァルト5曲、シューベルト5曲など。クライスラーと同時代の作曲家ではレハール2曲、ボルディーニ2曲などである。しかしこれらすべてを網羅すると焦点が曖昧になるため、本稿では次の16曲をウィーン関連の作品と見なし、分析対象とする。

(1) 曲名または副題に「ウィーン」を含むもの：11曲

a. クライスラーによるオリジナル作品：6曲

- ・《愛の喜び》 *Liebesfreud: Alt-Wiener Tanzweisen I*
- ・《愛の悲しみ》 *Liebesleid: Alt-Wiener Tanzweisen II*
- ・《美しきロスマリン》 *Schön Rosmarin: Alt Wiener Tanzweisen III*
- ・《ウィーン奇想曲》 *Caprice viennois*
- ・《ウィーン風小行進曲》 *Marche miniature viennoise*
- ・《ウィーン風狂詩的小幻想曲》 *Viennese Rhapsodic Fantasietta*

初めの3曲には、「ウィーンの古い舞曲 第1～3番」という副題が付けられている。

なお、《ウィーン奇想曲》と《ウィーン風小行進曲》のタイトルはフランス語で表記された。クライスラーはオリジナル作品のうちの10曲に、フランス語のタイトルを付けている。彼は洒落た雰囲気を演出するために、フランス語を使ったようである。

b. クライスラーによるアレンジ作品：5曲

- ・ブランドル 《オールド・リフレイン》
Johann Brandl (1835–1913): *Alter Refrain: Wiener Volkslied von J. Brandl*
- ・ゲルトナー 《ウィーンより》
Eduard Gärtner (1862–1918): *Aus Wien: Walzerlied von E. Gärtner*
- ・ゴドフスキ 《ウィーン風に》
Leopold Godowski (1870–1938): *Wienerisch*
- ・ホイベルガー 《真夜中の鐘》
Richard Heuberger (1850–1914): *Midnight Bells: Viennese Melody*

・クラカウアー《天国にて》

Alexander Krakauer (1866-1894): *Im Paradies: Wiener Volkslied von A. Krakauer*

原曲の作曲家達は、ウィーンで活動したことがある人々であった。クライスラーはゲルトナーとゴドフスキとは親交があったが、おそらく他の3名とも何らかの接点があったものと考えられる。

(2)《弦楽四重奏曲》に関するもの：5曲

クライスラーの作品はほとんどがヴァイオリン独奏曲である。ほかに室内楽作品としては、《弦楽四重奏曲》が1曲、作曲された。この作品は、第一次世界大戦の末期にアメリカ合衆国において書かれている。オーストリア軍に従軍してきたクライスラーは、アメリカが連合国側で参戦すると公の活動を自粛せざるを得なくなり、やむなく作曲をして過ごしていたのである。この期間に規模の大きな2つの作品、オペレッタ《りんごの花盛り *Apple Blossoms*》と《弦楽四重奏曲》が生み出された。

《弦楽四重奏曲》についてのクライスラー自身の言説が、ロックナーによる評伝に伝えられている。

それは昔と今のウィーン人の物語であり、またフリッツ・クライスラーの個人的な烙印がもっとも顕著な作品である。「Es ist mein Bekenntnis zu Wien. この曲は私のウィーン観を表明したものだ」と、彼は英語ではなしに母国語であるドイツ語で私に語った。¹⁴

中村訳では「ウィーン観」とされているが、ドイツ語の“Bekenntnis”は「信奉の表明、信仰告白」などの意味を持っており、この言葉を選んだクライスラーの、ウィーンに対する強い心情が窺える。したがって《弦楽四重奏曲》は「クライスラーがウィーンを念頭に置いて作曲したもの」であると捉え、ウィーン関連のクライスラー作品として分析の対象とする。全4楽章を、それぞれ1曲として扱う。

なお、《弦楽四重奏曲》の第3楽章は、ヴァイオリンとピアノのための既存の作品である《ロマンツェ》に序奏を加え、弦楽四重奏へ編曲したものである。《弦楽四重

14 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*. (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 194.

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner. Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、216頁。

奏曲》へ取り込まれたので、この《ロマンツェ》もウィーン関連の作品として扱う。

3. ウィーン関連のクライスラー作品：様相

分析対象の16曲を、【表1】にまとめた。クライスラーの作品のほとんどは作曲年が不明のため、代わりに出版譜に記載された「著作権取得年」を掲げた。そして「録音

【表1】ウィーン関連のクライスラー作品

| 作曲者 | 曲名 | 著作権取得年 | 調性 | 拍子 | 3/4拍子部分表示 | 曲の終止 | 備考 | 録音回数 |
|-----------|--|--------|--------------------------------|---------------------------------|--|-----------|--------------|------|
| Kreisler | <i>Liebesfreud: Alt-Wiener Tanzweisen I</i> | 1910 | C, F, C: | 3/4 | Allegro / grazioso | f | | 11 |
| Kreisler | <i>Liebesleid: Alt-Wiener Tanzweisen II</i> | 1910 | a, A, a, A: | 3/4 | Tempo di "Ländler"/ poco meno mosso | pp | | 12 |
| Kreisler | <i>Schön Rosmarin: Alt-Wiener Tanzweisen III</i> | 1910 | G: | 3/4 | Grazioso / meno mosso | p | | 11 |
| Kreisler | <i>Caprice viennois</i> | 1910 | h, H, h, H: | 4/4, 3/4, 3/8, 3/4, 3/8, 4/4 | Andante con moto / più lento | p | 二重音、 序奏 | 17 |
| Kreisler | <i>Marche miniature viennoise</i> | 1930 | d, D, d, D: | 2/4 | ... | fz cresc. | | 3 |
| Kreisler | <i>Viennese Rhapsodic Fantasietta</i> | 1948 | ..., Es, E, C, E, E, G, E: | ..., 3/4 | Andante con moto | f | 二重音、 序奏 | 1 |
| Kreisler | <i>Romanze</i> | 1910 | Es: | 3/4 | Andante con moto | pp | | 0 |
| Kreisler | 弦楽四重奏曲 <i>I. Fantasia</i> | 1921 |, (A): | 4/4, 3/4, 4/4, 3/4 | Allegro moderato | ppp | 序奏、 発想記号 | 1 |
| 〃 | 弦楽四重奏曲 <i>II. Scherzo</i> | 〃 |, (A): | 2/4, 4/4, 2/4 | ... | pp | 発想記号 | 1 |
| 〃 | 弦楽四重奏曲 <i>III. Einleitung und Romanze</i> | 〃 | ..., Es: | 2/4, 3/4 | Andante con moto | pp | 序奏、 発想記号 | 1 |
| 〃 | 弦楽四重奏曲 <i>IV. Finale</i> | 〃 | B, A, fis, g, B, A, ..., A: | 2/4, 4/4, 3/4 | Andante con moto | pp | 序奏、 発想記号 | 1 |
| Brandl | <i>Alter Refrain: Wiener Volkslied von J. Brandl</i> | 1915 | C: | 3/4 | Andante con moto | f | 二重音、 発想記号 | 14 |
| Gärtner | <i>Aus Wien: Walzerlied von E. Gärtner</i> | 1915 | F: | 3/4 | Langsamer Walzertakt | pp | 二重音、 発想記号 | 2 |
| Godowsky | <i>Wienerisch</i> | 1916 | F: | 3/4 | Andante espressivo e grazioso | p | | 3 |
| Heuberger | <i>Midnight Bells: Viennese Melody</i> | 1923 | C: | 3/4 | Andante con moto | pp | | 8 |
| Krakauer | <i>Im Paradies: Wiener Volkslied von A. Krakauer</i> | 1922 | C: | 3/4 | Allegro moderato | ff | 発想記号 | 3 |

回数」は、録音セッションの数である。コンサートで演奏された総数を確認することはほぼ不可能なので、録音の回数から演奏の頻度を推測したい。備考欄の「二重音」は、以下の(5)で述べる「二重音のカンティレーナ」の略称である。

(1) 調性

【表1】の「調性」では、大文字は長調、小文字は短調を表す。そして「…」は無調を、()は調性が曖昧であることを表す。

ウィーン関連のクライスラー作品では、長調が圧倒的に多く用いられた。オリジナルでは3曲、アレンジでは5曲すべてが、長調のみで作られている。

(2) 拍子

ウィーン関連のクライスラー作品のほとんどで、3/4拍子が用いられた。3/4拍子が現れないのは、2曲のみである。そのうちの一つ、《弦楽四重奏曲》の第2楽章は、多楽章形式の楽曲における急速な楽章として、2/4と4/4拍子により作曲された。《ウィーン風小行進曲》は、2/4拍子である。この作品は、おそらくウィーンの軍楽隊の音楽をイメージして作られている。ウィーンの軍楽隊は、日曜日などの休日にはしばしば公園で演奏し、市民達に親しまれていたのである。

(3) 3/4拍子部分の発想記号

16曲のうちの半数に近い7曲には「Andante con moto (元気よく歩く速さで)」とあり、適度な速さの3/4拍子が指示されている。《愛の悲しみ》には「Tempo di Ländler (レントラーのテンポで)」と表示される。レントラーとはゆったりした3/4拍子の民俗舞踏であり、ワルツの初期の形とも見なされることから、クライスラーは素朴なワルツを想定したものと考えられる。ゲルトナー《ウィーンより》には「Langsamer Walzertakt (遅いワルツの拍子で)」と表示され、特に遅いテンポが求められている。

(4) 曲の終止

ウィーン関連のクライスラー作品の終止は、弱音によるものが多い。特に《弦楽四重奏曲》は全4楽章のすべてが、ピアノシモないしピアノピアノシモで結ばれている。静かに昔を懐かしむような曲想がしばしば用いられたのである。

(5) 二重音のカンティレーナ

ヴァイオリンの名手であったクライスラーは、重音奏法を得意とした。二重音を連続させて抒情的な旋律を歌い上げるカンティレーナが、特にウィーン関連の作品で好まれ、4曲において大変効果的に用いられている。詳しくは次章で述べる。

【譜例1】二重音のカンティレーナ

The image shows a musical score for the first system of 'Caprice viennois' by Fritz Kreisler. The score is written for violin and consists of six staves. The key signature is G major (one sharp) and the time signature is 3/4. The tempo is marked 'Andante con moto più lento'. The score includes various performance instructions: 'dolce, e vibrato' (measures 16-25), 'espress.' (measures 26-35), 'rubato' (measures 36-45), and 'rit.' (measures 46-55). The piece concludes with 'sul Du. A' (measures 56-61) and 'più vivo'. The notation features a characteristic double-dotted eighth note followed by a sixteenth note, which is the 'cantilena' rhythm mentioned in the text.

Fritz Kreisler, "Caprice viennois", T. 16-61

(6) 序奏

ウィーン関連の作品には、序奏から始まるものが多い。特に《弦楽四重奏曲》は全4楽章のすべてに序奏がおかれている。次章で詳述する。

(7) 発想記号

《弦楽四重奏曲》には、ドイツ語による発想記号が大変多く用いられた。これらは《弦楽四重奏曲》の特徴である。第5章において検討する。

アレンジ作品では、3曲の計4カ所に、「ウィーン風に」という指示が記された。これらは必ずしも、特定のリズムや音型におかれたものではない。クライスラーはおそらく曲の中の強調したい箇所に、「ウィーン風に」という表記を付したようである。

【譜例2】"Wienerisch"

19 *poco dim. e rit.* *a tempo*
 23 *sul G*
 27 *poco rit.* *cresc.* *etwas lebhafter*

J.Brandl/Kreisler: *Alter Refrain*, T.19-30

【譜例3】"Wienerisch"

24 *a tempo* *p sehr zart* *f* *poco rit.* *Fres*

E.Gärtner/Kreisler: *Aus Wien*, T.24-36

【譜例4】"with a Viennese swing"

poco rit. *not too slowly* *with a Viennese swing*
pp *p a tempo* *cresc.*

A.Krakauer/Kreisler: *Im Paradies*, T.21-45

【譜例5】"in Viennese style"

whimsically scherzando *in Viennese style* *p*

A.Krakauer/Kreisler: *Im Paradies*, T.54-67

4. ウィーン関連のクライスラー作品：特徴的要素

(1) ワルツ

クライスラーにとってウィーンを象徴する音楽は、なんといってもワルツであった。ウィーンに関連した作品16曲のうちの14曲に、ワルツのリズムである3/4拍子が用いられている。

ワルツとは、18世紀末から流行した3拍子の舞踏および舞曲である。ウィーンでは19世紀初頭に大きなダンス場が作られ、ヨーゼフ・ランナーやヨハン・シュトラウス一世らによって人気作が続々と生み出された。多くの作曲家を魅了したワルツは、オペレッタ、オペラ、バレエ、管弦楽曲など様々なジャンルへも取り入れられていく。19世紀後半、ヨハン・シュトラウス二世が活躍した時期がワルツの全盛期であった。

クライスラーは、自作のワルツをいくつも盛り込んで2作のオペレッタを作っている。1作目の《りんごの花盛り》は1919年10月にニューヨークのグローブ劇場で、2作目の《シシィ》は1932年12月にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で初演されている。

クライスラーは、ワルツを積極的に支持した。《りんごの花盛り》の初演時に行われたインタビューで、クライスラーはオペレッタおよびワルツについて次のように語っている。

厳粛な芸術が必ずしも偉大なのではなく、内容の深刻さを芸術的価値の尺度にすることはできません。よいオペレッタは芸術の名に値します。¹⁵

私は軽い音楽が大好きです。私はワルツを崇拜し、日頃からワルツを書きたいと思っていました。¹⁶

《シシィ》は、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世とその妃エリーザベトの出会いの物語である。《愛の喜び》《愛の悲しみ》《ウィーン奇想曲》など、クライスラーの人気の

15 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*: (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 182.

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner. Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、203頁。

16 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*: (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 182.

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner. Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、204頁。

ワルツが満載となって構成されており、欧米で盛んに上演されて大きな成功を取めた。当時57歳のクライスラーにとってこの作品は、自らの音楽の総決算とも言えるオペレッタであった。

(2) 二重音のカンティレーナ

クライスラーのウィーン関連の作品の4曲で印象的に用いられる「二重音のカンティレーナ」は、ウィーンのポピュラー音楽である「シュランメル音楽 Schrammelmusik」を想起させるものである。

【写真2】



【写真3】



シュランメル四重奏団（ウィーン、1890年）

ウィーンでは19世紀後半、シュランメル兄弟を中心とした四重奏団が奏でる音楽が、カフェやホイリゲ（ワイン酒場）で絶大な人気を誇っていた。2本のヴァイオリンを担当するヨハン・シュランメル（1850～1893）とヨーゼフ・シュランメル（1852～1895）の兄弟は、いずれもウィーン音楽院でヨーゼフ・ヘルメスベルガー一世から正規の教育を受けている。この兄弟にバス・ギターとクラリネット（後にはアコーディオン）が加わった四重奏団の演奏は、ブラームスやヨハン・シュトラウスなどをも魅了したという。飲食する客達が楽しめるよう、彼らのほとんどの曲は長調である。兄弟のヴァイオリンが、二声のメロディーを奏でていく。陽気で気楽で、懐かしさも漂う音楽であった。

クライスラーは、皆が笑顔になるようなこのシュランメル音楽を、ことのほか好んだのであろう。1本のヴァイオリンで二重音を奏し、ウィーンに因んだ作品の中にゆったりと歌い上げるカンティレーナを実現したのである。【譜例1】（第3章（5））に見られる通り、クライスラー作品における二重音の音程は多様である。ヴァイオリン曲で通常用いられる3度や6度に留まらず、2、4、5、7度なども駆使され、あたかも2

声部で自由に歌っているかのように響くのである。

(3) 序奏

ウィーンに関連したクライスラーのオリジナル作品11曲のうち6曲が、序奏から始まる。《弦楽四重奏曲》では、全4楽章すべてに序奏がある。しかもその第3楽章は、既存の曲である《ロマンツェ》に、序奏を付けたものだった。クライスラーは生涯に200曲近い作品を作っているが、序奏が付けられた作品は、ウィーン関連の6曲のほかには2曲のみである。クライスラーにとって序奏は、「ウィーン風」を象徴する要素の一つと言えよう。

これらの序奏の規模は様々だが、その後続く主部とは明らかなコントラストを成す。調性はほとんどが曖昧で、半音階が特徴的に用いられる。また拍節感も少ない。クライスラーが青年時代を過ごした世紀末ウィーンの、無調音楽が想起させられよう。なお、ヨハン・シュトラウスなどによる大規模なワルツの多くは、序奏のあとにいくつかのワルツが続くという構成であった。クライスラーは、それらの作品からもヒントを得ていたのかもしれない。

【表2】クライスラー作品における序奏一覧

| 曲名 | 小節数 | 調性等 | 特徴的な音階 | リズム | 序奏後の調性 |
|---------------------------------------|-------|--------------|--------|---------|---------|
| 〈ウィーン関連の作品〉 | | | | | |
| <i>Caprice viennois</i> | 15 | 主にh-mollの属和音 | 半音階 | 自由 / 拍節 | 長調 |
| <i>Viennese Rhapsodic Fantasetta</i> | 小節線なし | 無調 | 半音階 | 自由 | 無調から長調へ |
| 弦楽四重奏曲：第1楽章 | 18 | a-moll、無調 | 半音階 | 自由 / 拍節 | 長調 |
| 〃：第2楽章 | 12 | 無調 | 半音階 | 拍節 | 短調 |
| 〃：第3楽章 | 28 | 無調 | 半音階 | 拍節 | 長調 |
| 〃：第4楽章 | 6 | B-dur | 半音階 | 自由 | 長調 |
| 〈上記以外の作品〉 | | | | | |
| <i>Recitativo und Scherzo-Caprice</i> | 29 | d-moll | 半音階 | 主に自由 | 長調 |
| <i>La Gitana</i> | 7 | f-moll | ジブシー音階 | 主に自由 | 短調 |

5. クライスラーにとっての「ウィーンらしさ」

(1) 《弦楽四重奏曲》に用いられた発想記号

【表3】に示した通り、クライスラーは非常に多くのドイツ語による発想記号を《弦楽四重奏曲》に書き入れた。クライスラーは通常、一般的なイタリア語表記の発想記号を用いるので、ドイツ語による発想記号は《弦楽四重奏曲》の特徴である。第2章(2)で引用した通り、クライスラーはこの楽曲を、「ウィーンへの信仰告白」と表現した。曲中に使われた発想記号を見ると、「warm (温かく)」「innig (愛情を込めて)」「schmerzlich (心を痛めて)」「wie eine ferne Erinnerung (遠い思い出のごとくに)」「geheimnisvoll (神秘的に)」などの語句が目立つ。クライスラーはこの作品を、第一次世界大戦の末期にアメリカ合衆国で作曲している。戦火にある遠い故郷ウィーンへの、クライスラーの思い入れが感じられる語句である。

さらに目を引かれるのは、第1楽章に書き込まれた「wie verklärt (晴れ晴れとしたように、喜びに輝いたように)」という発想記号である。クライスラーのユダヤ人仲間であったアルノルト・シェーンベルクには、《*Verklärte Nacht, op. 4* 浄められた夜》(1899年)という青年時代の代表作がある。シェーンベルクのその作品を彷彿とする、トレモロを背景とする音型をクライスラーは《弦楽四重奏曲》の中に書き、そこへまさに“verklärt”と記しているのである。二人がともに過ごした「ウィーンの世界末」

【表3】 弦楽四重奏曲に用いられたドイツ語による発想記号

| 第1楽章：Fantasia | 第2楽章：Scherzo | 第4楽章：Finale |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| mit ritterlichem Pathos | fröhlich×2 | schalkhaft |
| ungestüm | hervortretend | rhythmisch und flott |
| leidenschaftlich | mit Ausdruck | mit Schwung |
| drängend | mit Gefühl | einfach, mit zartem |
| etwas drängend | etwas zurückhaltend | Ausdruck |
| drängender | zurückhaltend | zurücktreten |
| etwas drängender | ruhiger | drohend |
| noch drängender | 第3楽章：Einleitung | mit ritterlichem Pathos |
| noch immer drängender | und Romanze | ungestüm |
| und gesteigertem | Langsam beginnend nach | einfach und innig |
| mit sehr gesteigertem | und nach etwas | bedeutungsvoll |
| Ausdruck | beschleunigen bis | wie eine ferne |
| hervortretend | Allegretto | Erinnerung |
| breit | leidenschaftlich | mit schmerzlichem |
| warm | einfach aber warm | Akzent |
| sehr warm | geheimnisvoll | verklingend |
| warm und innig | verklärt, molto legato, | |
| sehr zart und innig | sehr innig | |

【譜例6】 発想記号 "verklärt"



Fritz Kreisler 《弦楽四重奏曲 第1楽章》, T. 82-89

への思いを、クライスラーはこの作品に描いたのではないだろうか。

(2) ノスタルジーと居心地のよさ

クライスラーが作品で表現した「ウィーンらしさ」は、二つのキーワードで表せるだろう。

一つ目は、「ノスタルジー (郷愁あるいは懐古)」である。ウィーンの人々は常に「Alt-Wien (かつてのウィーン、古き良きウィーン)」を懐かしんだという。その「かつての」がいつの時代を指すのかは、時によって変化した。クライスラーが青年時代を過ごした世紀転換期の頃のノスタルジーの対象は、ハプスブルク帝国がより繁栄していた時代のウィーンであった。当時のオーストリアは、刻々と国力を失っていたのである。そして第一次世界大戦に敗戦したオーストリアは、小さな共和国になる。人々のノスタルジーの対象は、ハプスブルク帝国の時代のウィーンとなった。そして1938年、オーストリアは遂にナチス・ドイツに併合される。ノスタルジーの対象は、独立国オーストリアの首都ウィーンとなった。クライスラーの音楽は、懐古的な音調に満ちている。調性は長調、テンポはしばしばゆったりとしており、曲は弱音で終止する。昔を懐かしむような彼の音楽は、どの時代も、人々の心にノスタルジーを呼び起こしたのではないだろうか。

キーワードの二つ目は、ウィーン人の気質を表す言葉、「Wiener Gemütlichkeit

(ウィーン独特の居心地のよさ)」である。ウィーンの多くの人々は公園へ通い、劇場を訪れ、カフェやホイリゲで長い時間を過ごした。そこには差し迫った政情の崩壊の不安から目をそらす、享乐的な傾向もあったであろう。人々はのんびりと楽しむ雰囲気、ことさらに大切にしようである。クライスラーの明るく親しみやすい音楽は、まさに「Wiener Gemütlichkeit」を醸し出すのではないだろうか。

おわりに

クライスラーは、「ウィーンらしさ」を音楽で表現した。彼はウィーンに生まれ育ったが、ウィーン出身の音楽家は、実はあまり多くない。「クライスラーとウィーン」を結びつけて売り出したのは、所属事務所や、ビジネスウーマンであった彼の妻による戦略であったかもしれない。しかし、クライスラー自身の故郷への愛着は、とても強いものであった。彼は生涯にわたって多くのレコード録音を行っているが、晩年のインタビューで気に入っている録音を問われた際、いくつかの作品を挙げたあとで、次のように答えている。

ウィーンのマロディーを弾いたもののがほとんどが好きです。¹⁷

クライスラーの音楽は、「かつてのウィーン」への憧れに満ち、ノスタルジーをかき立て、心地よく響く。彼が素直に「ウィーンらしさ」を表現した音楽は、昔も今も人々の心に共感をわき起こす。クライスラーの音楽はウィーンを越え、この先もきっと広い世界の人々を魅了していくことであろう。

17 Lochner, Louis P. *Fritz Kreisler*. (1st ed., NY, 1950) Expanded ed. New Jersey 1981, p. 271.

ルイス・P・ロックナー『フリッツ・クライスラー』(Louis P. Lochner. Fritz Kreisler. New York, 1950.) 中村稔訳、東京：1975年、293頁。